広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代ギリシア語の関係詞πο#とδ　δπο#osの用法 : コイネーギリシア語と対照して
Author(s)	高橋, えりこ
Citation	ニダバ , 19 : 43 - 52
Issue Date	1990-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047208
Right	
Relation	

論　文

現代ギリシア語の関係詞πoύとὁ ὁπoῖoς の用法[1)]

—コイネーギリシア語と対照して—

高　橋　りえこ

§1．はじめに

＜1＞現代ギリシア語に於ける関係詞 πoύ と ὁ ὁπoῖoς[2)]に関する従来の記述[3)]

現代ギリシア語、特に民衆語では、曲用を持たない不変化詞 πoύ の使用が一般的であるが、次のような場合には πoύ よりも ὁ ὁπoῖoς が用いられる。曖昧さを避ける場合、具体的には関係節の先行詞となる可能性を持つ語が二語以上あり関係節がどの語を修飾するか分かりにくいとき、或は関係詞が関係節内で所有や前置詞の目的語の機能を有する場合に ὁ ὁπoῖoς が使用される。

また文体論的立場から πoύ の頻用が上品に感じられないために stylistic variantとして、ὁ ὁπoῖoς が πoύ の代わりに用いられ、関係詞が関係節内で主語や直接目的語の機能を持つ場合も文体により ὁ ὁπoῖoς の使用が見られる。

＜2＞コイネーギリシア語と対照する目的

<1>で触れたように使用される環境が異なる πoύ と ὁ ὁπoῖoς は、現代語訳を行う際にどの様に使い分けられているのだろうか。コイネーギリシア語によるテキストとその現代語訳を対照して、二つの関係詞が形成する関係節が如何なる形式と対応しているかを調査、分析する。そして πoύ 及び ὁ ὁπoῖoς の対応の傾向から、訳出の際に翻訳者がどの様な基準で関係詞を選択するかを推定し、各関係詞（特に πoύ ）の特質を考察することを目的とする。

＜3＞使用テキストと対応形のカード作成方法

現在ギリシアで最も広く使われている新約聖書（原典対訳版）H KAINH ΔIAΘHKH のうちマルコ伝、ルカ伝及び使徒行伝をテキストに、次のような方法で対応形のカードを作成した。

1. πoύ 及び ὁ ὁπoῖoς 節とその先行詞に対応する箇所をすべてカードに抜き出す。
2. 関係詞節と先行詞の両方に対応形がある場合（例えば対応形が先行詞をもつ関係詞節である場合）、πoύ と ὁ ὁπoῖoς の先行詞とに完全に一致するか確認する。対応

形の先行詞に一部でも欠けるもの、或は現代語訳テキストにない要素が原典に見られるものは、除外例とする。

3.関係詞節のみに対応形がある場合（例えば対応形が実詞化された分詞である場合）、関係詞の先行詞に対応する形式がない点をカードに付記する。

4.関係詞節と先行詞の両方に対応形がない場合（例えば構文そのものが異なる場合）、対応形がないことをカードに付記する。

これらはすべて一枚のカードに記入されなければならない。

但し、本稿の調査対象となった πού 及び ὁ ὁποῖος 節は、分析の操作上、関係節内の定形動詞が一つしかないものに予め選別されている。節内の定形動詞が複数ある場合に、これに対する対応形式が一通りでないため、分析が複雑化するので今回の分析から除くことにした。

尚、各関係詞の対応傾向はすべて小数点第二位を四捨五入した％で示すことにする。

§２．各関係詞の対応形による分析

＜１＞

上記の方法によって得られた πού 及び ὁ ὁποῖος 節の対応形 794例は、関係詞節、分詞句、冠詞句に大別される。（冠詞を付加された分詞は分詞句に分類する。）この分類に従い πού 及び ὁ ὁποῖος 節の対応状況をまとめた結果が＜表－１＞である。

<表－１>

	関係詞節	分詞句	冠詞句	その他	対応形なし
πού	149 (53.6)	307 (83.9)	44 (97.8)	52 (71.2)	22
ὁ ὁποῖος	129 (46.6)	59 (16.1)	1 (2.2)	21 (28.8)	10
合計（%）	278(100.0)	366(100.0)	45(100.0)	73(100.0)	32

この結果から πού 節は分詞句、冠詞句に対応して使用される傾向が指摘できる。特に冠詞句を対応形とする ὁ ὁποῖος 節は一例しかないため、冠詞句は πού 節で訳出されていると言える。これに対して関係詞節への対応については πού 、ὁ ὁποῖος 共にほぼ同様の対応率を示している。

本稿では、以下に、関係詞節（ ὅς 節）と分詞句への πού 及び ὁ ὁποῖος の対応傾向に関して更に分析を試みることにする。

＜２＞関係節との対応

2.1

πού および ὁ ὁποῖος 節に対応する関係節を形成する関係詞は ὅς （255例）、ὅστις （21例）、 ὅσος （２例）である。このうち ὅς を取り上げることにする。

2.2 ὅς 節との対応

古典ギリシア語の関係詞には、 ὅς ・ οἷος ・ὅσος 等の単純関係詞 （ simple relative）と、 ὅστις ・ ὁποῖος ・ ὁπόσος 等の複合関係詞（ compound relative）とがあり、前者は個別的な言及を、後者は普遍的な言及を為していた。[4]

ところがコイネーギリシア語になると、 ὅς の使用が一般的となり、古典期に見られていた ὅς と ὅστις の厳密な意味上の対立は、 殆ど失われていた。[5] このため、ὅς は definiteのみならずindefiniteな関係詞節をも形成した。 indefiniteに解釈される ὅς 節は先行詞を持たない場合が多く、更に genericに解される ὅς 節は、節内の定形動詞が小辞 ἄν（或は ἐάν ）を付加した接続法となる。[6]

このことから πού 及び ὁ ὁποῖος 節に対応する ὅς 節を次のように分類して対応分布を調査した。（＜表－２＞）

＜表－２＞

	先行詞をもつ ὅς 節		先行詞をもたない ὅς 節	
動詞の法	直説法	接続法	直説法	接続法
πού	78 (43.1)	3	42 (82.4)	17
ὁ ὁποῖος	103 (56.9)	1	9 (17.6)	2
合計（%）	181(100.0)	4	51(100.0)	19

上掲の＜表－２＞から、先行詞をもつ ὅς 節を訳出する際には πού よりも ὁ ὁποῖος の使用率がやや高いことが分かる。この場合の関係詞の選択は、§１で触れたように、関係詞が関係節内で如何なる機能をもつか、或は関係詞節の先行詞等を基準にして行われていると考えられる。[7] いずれにせよ、先行詞をもつ ὅς 節には πού も ὁ ὁποῖος も対応しているという結果が得られた。（（例－１））

＊以下例文に於て、関係詞節の先行詞に下線を付した。また、先行詞及び関係詞節はイタリック体で、母型文の構成要素はゴシック体で書き分けてある。

＊注に於て、関係詞はーーーで表してある。

＊最初に現代語訳からの、次にそれに対する原典からの例を□に入れて挙げてある。

（例－１）定形動詞が直説法であり先行詞をもつ ὅς 節との対応例

(a) πού 節　マルコ伝12:10

ὁ λίθος ποὺ ἀπέρριψαν οἱ οἰκοδόμοι
the stone --- rejected the bilders

λίθον ὃν ἀπεδοκίμασαν οἱ οἰκοδομοῦντες stone -- rejected the bilders

「家造り達が捨てた石」
the stone which the builders rejected

(b) ὁ ὁποῖος 節　マルコ伝　7:13

μὲ τὴν παράδοσίν σας, τὴν ὁποίαν διαβιβάζετε
with the tradition yours ---------- (you) hand down

τῇ παραδόσει ὑμῶν ἣ παρεδώκατε the tradition your - (you) have handed down

「君達が伝えてきた言伝え」
though your tradition which you have habded down

一方、先行詞をもたない ὅς 節には πού が対応する傾向があると指摘される。このことから πού はindefinite或はgenericな関係節を形成する関係詞であると考えられよう。

また、ὅς 節には先行詞がないために、訳出の際に、 πού 及び ὁ ὁποῖος節には先行詞が補われる。<表－２>の先行詞なしの ὅς に対応している πού 59例のうち、54例が指示代名詞 ἐκεῖνος を先行詞に用いている。（（例－２・３））

（例－２）定形動詞が直説法で先行詞をもたない ὅς 節との対応例

(a)先行詞が ἐκεῖνος である πού 節　ルカ伝　6:46

δὲν κάνετε ἐκεῖνα ποὺ σᾶς λέγω;
not (you) do these --- you (I) say

οὐ ποιεῖτε ἃ λέγω not (you) do - (I) say

< ἃ = ταῦτα ἃ >

「私の言うことを行わないのか」
do not do what I say

(b)先行詞が ἐκεῖνος 以外の名詞である πού 節　マルコ伝　2:25

τὸ Σάββατον, πρᾶγμα, πού δὲν ἐπιτρέπεται
the sabbath thing --- not is allowded

ἐν τοῖς σάββασιν ὃ οὐκ ἔξεστι on the Sabbath - not is allowded

「安息日にしてはならないこと」
what is not allowded on the Sabbath

類例：ルカ伝　7:45　13:30

(c)指示代名詞以外の 文 を先行詞とする ὁ ὁποῖος 節　使徒行伝　2:32

＜表－2＞で指摘されたように先行詞なしの ὅς 節には πού の使用傾向が見られたが、関係節内での関係詞の機能が、前置詞の目的語である場合、格機能を明示するために ὁ ὁποῖος が使用されていると考えられる例を得ることができた。

τοῦτον τὸν Ἰησοῦν ἀνέστησεν ὁ Θεός, διὰ τὸ ὁποῖον ὅλοι ἐμεῖς
this the Jesus raised the God for --------- all we

εἴμεθα μάρτυρες
are witnesses

τοῦτον τὸν Ἰησοῦν ἀνέστησεν ὁ Θεὸς, οὗ πάντεσ ἡμεῖς this the Jesus raised the God -- all we
ἐσμεν μάρτυρες are witnesses

「このイエスを神はよみがえらせた、私たちは皆その証人なのである」
this Jesus has God raised up ; of this we all are witnesses

類例：使徒行伝　3:18-1

（例－3）定形動詞が接続法で先行詞をもたない ὅς 節との対応例

この対応形をもつ πού 節の先行詞はすべて指示代名詞 ἐκεῖνος である。

(a)先行詞と πού 節が不特定な人（もの）を表す例

類例：マルコ伝　3:29　3:35　4:25　8:35　4:25　8:35　10:15　10:43　10:44
13:11

ルカ伝　8:18-1　8:18-2　9:48-1　9:48-2

ルカ伝　9:24

ἐκεῖνος δὲ ποὺ θὰ χάσῃ τὴν ζωήν του ἐξ αἰτίας μου
this --- loses the life his on account Mine

ὃς δ'ἂν ἀπολέσῃ τὴν ψυχὴν αὐτοῦ ἕνεκεν ἐμοῦ -- loses the soul his on account My

「私のためにその命を失うものは皆」
whoever loses his life on My account

(b)先行詞と ποὺ 節が特定の人（もの）を表す例　マルコ伝　14:44

ἐκεῖνον ποὺ θὰ φιλήσω
this --- (I) will kiss

ὃν ἂν φιλήσω --- (I) will kiss

「私の接吻するその人」
the one whom I kiss

類例：マルコ伝　7:11

(c) ὁ ὁποῖος節　ルカ伝　10:22

ἐκεῖνος,εἰς τὸν ὁποῖον θέλει ὁ Υἱὸς νὰ ἀποκαλύψῃ
this to --------- wants the Son to reveal

ᾧ ἐὰν βούληται ὁ υἱὸς ἀποκαλύψαι - wants the Son to reveal

「（父を）あらわそうとして子が選んだ者」
he to whom the Son chose to reveal Him

類例：ルカ伝　8:19

＜3＞分詞句との対応

3.1

コイネーギリシア語に於て分詞は次のように分類される。[8]

1.Substantival Participle ---修飾する実詞を伴わずしばしば冠詞と共に用いられて自ら実詞化する。

2.Attributive Participle ---実詞に対置され、それを修飾する。

3.Adverbial Participle ------動詞の付帯的状況を表す。

4.Supplementary Participle --動詞の迂言法に用いられる。

このうち4.は対応形である分詞句に見られないために、予め分類から除くことにする。これ以外の1.から3.の分類に従って ποὺ 及び ὁ ὁποῖος節の対応状況を整理したのが、次

の<表－3>である。

<表－3>

Participle	Substantival	Attributive	Adverbial
πού	176 (100.0)	119 (76.3)	12
ὁ ὁποῖος	0	37 (23.7)	22
合計 (%)	176 (100.0)	156(100.0)	34

上記の結果によると、πού 節はSubstantival Participleに完全に対応していると言える。またAttributive Participle に対しても πού 節の対応傾向が見られると言える。これに対して、出現例が限られているために一般化はできないが、Adverbial な分詞句には ὁ ὁποῖος が πού の他に用いられている。

以下に於てSubstantival Participleに対応する πού 節について更に調査して行きたい。

3.2 Substantival Participleに対応する πού 節

実詞化を行う分詞は自らと同格の実詞が併置されないため、現代語訳に際して、πού 節に、先行詞として原典に見られなかった語が補われる。その先行詞は次の<表－4>を除いて、すべて指示代名詞である。

このことから主に「指示代名詞＋ πού 節」がSubstantival Participleに対応すると言えるだろう。（（例－4））

<表－4>

名詞	普通	ルカ1:53 8:12 9:17	3
	抽象	使20:19 23:31	2
不定代名詞		マルコ1:3 ルカ3:4 11:4 11:10 14:44 14:30 16:18 19:26 21:55 使9:14 10:44 13:39 28:18	14
その他		マルコ13:11 ルカ6:20 6:21 6:25-1 6:25-2 6:27 11:13 16:15 使7:58	9

＊例文に於て、冠詞・πᾶς ・分詞には分詞のごとく印が付けてある。

（例－4）

(a) πού 節の先行詞が指示代名詞である対応例　使徒行伝　19:13-1

ἐπάνω εἰς ἐκείνους πού εἶχαν πνεύματα πονηρὰ
on these --- had spirits evil

ἐπὶ τοὺς ἔχοντας τὰ πνεύματα τὰ πονηρὰ on the having the spirits the evil

「悪霊につかれている人に」
over those that had evil spirits

(b) πού 節の先行詞が指示代名詞以外の名詞である対応例　ルカ伝　8:12-2

οἱ ἄνθρωποι πού ἄκουσαν
the people --- heard

οἱ ἀκούσαντες the hearing

「聞いた人」
people who hear

先行詞をもたないindefiniteな ὅς 節と同様に、（例－4）から不特定な人についての言及を行うSubstantival Participleに対して、「指示代名詞＋ πού 節」が用いられていることが明らかになったと言える。

更に、原典に於て「πᾶς ＋（冠詞）＋分詞」（～するものは誰でも・何でも）というgenericな言及を為す形式に対応する πού 節の先行詞は<表－5>のような分布を示している。

<表－5>

指示代名詞	ルカ1:71 21:36　使4:24-4	3
不定代名詞	マルコ7:178 ルカ2:54 11:4 11:10 14:11 14:30 16:18-2 19:26 21:35　使6:15 9:14 10:44 13:39 28:30	14

Substantival participleのうちでgenericな分詞句「πᾶς ＋（冠詞）＋分詞」に対しては、不定代名詞を先行詞とする πού 節を主に使用していることが指摘できよう。

（（例－5））

（例－5）

(a)先行詞が指示代名詞である対応例　ルカ伝　1:71

ἀπὸ τὰ χέρια ὅλων ἐκείνων ποὺ μᾶς μισοῦν
from the hands of all these --- us hate

ἐκ	χειρὸς	πάντων	τῶν	μισούντων	ἡμᾶς
from	hand	of all	the	hating	us

「すべて私たちを憎むものの手から」
from the hand of all who hate us

(b) 先行詞が不定代名詞である対応例　ルカ伝　14:11

καθένας ποὺ ὑψώνει τὸν ἑαυτόν του
everyone --- raises himself

πᾶς	ὑψῶν	ἑαυτὸν
all	raising	himself

「自分を高くするもの」
whoever makes himself prominent

§3．結論

これまでの分析で次のことが明らかになった。

<1>関係詞節との対応関係

ποὺ 及び ὁ ὁποῖος 節は先行詞をもつ ὅς 節に対してやや ὁ ὁποῖος 節が上回る対応率を示してはいるものの、ほぼ等しい対応分布を示した。これに対してindefinite或は genericと解釈される先行詞なしの ὅς 節には、主に「ἐκεῖνος ＋ ποὺ 節」が対応し使用されている。

<2>分詞句との対応関係

Substantival Participleに対して、ποὺ 節が完全に対応しており、特に genericな分詞句には不定代名詞が先行詞である ποὺ 節が用いられる。

上記の結果は、現代ギリシア語において広く用いられる ποὺ が、原典（コイネーギリシア語）を現代語訳する際にも頻繁に使用され、特にindefiniteあるいはgenericな言及を為す先行詞なしの ὅς 節や分詞句に対応して用いられる傾向を指摘している。このことから、ποὺ は ὁ ὁποῖος と比べると、不定的・普遍的な関係詞節を形成する機能を有する関係詞であると言えるだろう。

§4．註

1）本稿は、1989年広島大学大学院文学研究科（言語学）に提出した修士論文『現代ギリシア語に於ける関係詞 ποὺ の用法ーコイネーギリシア語と対照してー』の本論第２部の内容の一部を要約し、加筆訂正をしたものである。

2） ὁ ὁποῖος は曲用をもつが、男性・単数・主格形を代表形として用いる。

3）関本　p80、Mackridge　p248ff

4）Smyth　p561

5）Turner　p47、Schwyzer　p241

6）Smyth　p564

7）高橋　(1989)『現代ギリシア語に於ける関係詞 πού の用法』　p 26ff

8）Smyth　p455、　Turner　p150ff

§5．テキスト及び参考文献

テキスト

H KAINH ΔIAΘHKH

:Τὸ πρωτότυπον κείμενον μὲ νεοελληνικὴν μετάφρασιν

(1967) BIBΛIKH ETAIPIA , AΘHNAI

参考文献

Blass,F & Deburunner,A (1984) Grammatik des neutestamentlischen Griechisch Vandenhoeck-Ruprecht, Göttingen

Joseph,B & Warburton, I (1987) Modern Greek Croom Helm, Australia

Keenan,C (1985) "Relative Clause" Language Typology and Syntactic Description II Shopen,H (ed) Cambridge, New York

Mackridge,P (1985) The Modern Greek Lnaguage Oxford, London

Mirambel,A (1949) Grammaire du Grec Moderne EK, Paris

関本至 (1968) 「現代ギリシア語文法」泉屋書店

Smyth,H (1984) Greek Grammar Harvard University Press, New York

Turner,N (1963) A Grammar of New Testament Greek T&T Clark, London